

造形表現指導における専門性の向上を 目指す保育者研修の試み

— 実践提示型研修の実施と検討 —

楨 英 子*

問題と目的

1. 保育者研修の現状

「保育の質の向上」が今日の保育における大きな課題となっている。保育の質を左右する要素は多岐にわたるが、その中核となるのは保育者であり、保育者の資質・専門性の向上においては、「研修」が重要な役割を担っている。保育者に求められる専門性は幅広く、子ども理解とそれに即した指導計画の立案、具体的な環境構成などの保育技術、さらに子育て支援や幼小連携、特別支援や安全管理等に関する専門性も要求される。

こうした現状をふまえ、平成20年の保育所保育指針の改定に際しては、「施設長の責務」⁽¹⁾として、「課題を踏まえた保育所内外の研修を体系的、計画的に実施すること」が明示された。また、社会福祉法人全国保育協議会全国保育士会は、「倫理綱領」⁽²⁾のなかで、専門職の責務として研修や自己研鑽を通しての資質の向上を求めている。そして、そのための研修方法として、職場を通じた研修OJT（on the job training）・職場を離れての研修OFF-JT（off the job training）・自己啓発援助制度SDS（self development system）の3つの形態が示されている（表1）⁽³⁾。

OJT（職場を通じた研修）は、先輩が後輩を育成する研修であるが、チューター制と公開保育研究を組み合わせて取り組んでいる自治体もある。OFF-JT（職場を離れての研修）には、開催場所が職場内で業務から離れる場合と職場外に派遣される場合があるが、職場外の研修にも、保育現場で行われる場合と保育現場以外で開催される場合がある。また、SDSの取り組みとしては、全国保育士会が、「保育e-learning」というインターネット上の無料研修サイトを平成19年から運営し、研修の時間、費用の確保や園外研修への派遣が困難という声にこたえている。

*総合福祉学部 准教授

(1)

表1 研修方法の形態

OJT (on the job training)	職場を通じての研修：職場の先輩が職務を通じて、または職務に関連させながら、後輩を指導・育成する研修。業務上の指導・助言、スーパービジョン、ケーススタディ、自己評価などにより実施。一人ひとりの知識・技術・技能等に応じて、計画的・継続的に行う。
OFF-JT (off the job training)	職場を離れての研修：職務命令により、一定期間日常業務を離れて行う研修。職場内の集合研修と職場外の研修への派遣の2つがある。各種研修会に計画的・積極的に参加できるようにすることと、研修内容を伝達し日々の保育に活かしていくことが大切。
SDS (self development system)	自己啓発援助制度：職員の職場内外での自主的な自己啓発活動を職場として認知し、経済的・時間的な援助や施設の提供などを行うもの。個人が必要とする知識・技術を自ら進んで学んだり、自己の感性を深め、人間性を豊かにすることで、保育の質を高めることが重要。

出典：『保育士の研修体系～保育士の階層別に求められる専門性』全国保育士会「保育士の研修体系」検討特別委員会2007

幼稚園教諭については、「教育基本法」第9条において、絶えず研究と修養に励むことや研修の充実が規定されており、教員としての学びの機会が用意されている。公立幼稚園においては研修制度が確立しているが、建学の精神を尊重した運営を行っている私立幼稚園においても、平成20年に全日本私立幼稚園幼児教育研究機構から「研修ハンドブック」⁽⁴⁾が発刊され、研修履歴の蓄積を資質向上につなげる動きが見られるようになってきた。

保育者研修の主催者については、都道府県や市町村などの各自治体、保育関係の業界団体、保育関連業者などさまざまである。また対象も、管理職・主任等・層別（級別）・新採用などさまざまな枠が設定されており、それぞれの課題に応じるように計画されている。このように多様な保育者研修が用意され、実施されているが、運営上の課題も多い。

2. 保育者研修の課題

岸井（2011）は、保育の長時間化や求められている役割の増大などにより、日々多忙さを増す保育現場において、形骸化し負担ばかりが残る研修になっていないかと問いかけ、時間の確保やその進め方などが課題となっていると指摘している⁽⁵⁾。

形骸化については、たとえば、「園内研修」は、園に招いた研究者や指導者から答を得ようとする一過性の研修になり、保育者が自発的に問いを発し、主体的に課題解決に向かう姿につながらないことが考えられる。また「園外研修」においても、公開保育を伴う「研究会型」は実践を見て具体的な学びが得られやすい反面、公開のための非日常的な保育となり課題の共有がされにくい場合もあるだろう。専門家を招く「講座型」の研修は、専門性が高い学びが期待できる一方、知識や技能の習得が目的となり、保育現場の実態や必要感とのズレから、保育への還元が難しく、受動的になりやすいという問題点がある。

三谷（2008）は、保育研修を保育者の当事者性をもとにしたものにすべきであると述べ、保育者の専門性を高めるためには、自己の保育を省察し、多様な他者（子ども、同僚、保護者、研究者など）と「対話」を生成し、「学び合う」必要性があるとし、保育の「おもしろさ」と「奥深さ」と「難しさ」を仲間とともに共有できているか、どのようにして共有するかを問い直すことをすすめている⁽⁶⁾。こうした研修のあり方は、森上史郎が1980年代に保育カンファレンスの導入を提唱したことから広がりを見せ、臨床相談等で事例に基づく検討を通して専門性を高めていくカンファレンスの形式が保育研修に取り入れられるようになった⁽⁷⁾。そこでは、正答や一致を求めず、多様な考え方や実践にふれて自分がひらかれ、違った視点に気づき、考え方を再構築する過程を通してそれぞれが成長することを重視する。こうした研修のあり方は保育現場に浸透していったが、研修時間の確保が壁となっている。全国私立保育園連盟の保育・子育て総合研究機構研究企画委員会は、『わくワクシート』⁽⁸⁾を発行し、「60分の時間をどこかでつくりましょう！」と呼びかけ、冊子をきっかけに、保育園の中から語り合い・分かち合いを始めることを促している。

以上のように、保育者研修を実質的なものにし、省察と自己教育力育成の場としようとする動きがみられるが、具体的な研修内容については、事後に自治体や保育業界団体単位の冊子等で報告されているに過ぎず、それに対する評価や保育研修のあり方に関する議論はまだ十分とは言えない。保育者研修の内容を具体的に示し、その成果を検討した研究としては、養育スキル研修の効果を幼児の行動から検証した研究⁽⁹⁾があるが、その他にはほとんどみられない。多様な研修が実施されており、特に表現技能に関わる実技研修は盛んに行われているが、それらを対象とした研究は乏しく、筆者がこれまでに行った研修に関する発表についても、実践部分を報告したに過ぎない⁽¹⁰⁾。こうした現状から、実技研修の多くが保育技術の伝授を目的としたものになり、子どもの主体的な表現をいかに引き出すかという課題の解決や保育者自身の振り返りやその後の成長を目指す研修にはなっていないことが推察され、表現指導上の専門性の向上を目指す研修のあり方を探究する研究の広がりが期待される。

そこで本稿では、筆者が考案した新たな研修の形態を示し、試みた結果を検討することを通して、造形表現の指導上の専門性を高める保育者研修のあり方について考察する。

研究の経過

1. 保育者研修の振り返り

筆者は、平成元年以来、幼稚園での研修の講師を数多く担当してきた。研修の形態は、保育参観と保育後の振り返りを主とした研修と保育後の時間帯や夏季休業中に行われる研修に大別される。さらに、それぞれの研修には、園内研修と園外研修がある。園内研修の場合は、特定のクラス以外の子どもたちを帰宅させて全教員が1クラスを参観する研修と、全教

員で保育を振り返り、園の研究課題について協議する研修形態がある。園外研修は、公開保育を含む「研究会型」の研修と教員対象の「講座型」のものがあるが、いずれにしても、幼稚園教諭を対象とした研修は、園に子どもがいない時間帯に教師が一堂に集まることを前提として行われていた。

一方で、保育所職員を対象とした研修は、子どものいる時間帯に行われる。平成18年度に、初めて保育所での研修の講師を依頼された際に、開催時間はお昼寝の時間帯に設定され、参加者は各保育所から1～2名程度で、保育の担当を調整して参加していた。その研修は実技研修で、「保育技術の向上を図る」ことを目的に、0～2歳児の保育に役立つ遊具作りを行った。研修の流れは、発達に応じた手作り遊具を心身の発達の流れに関連付けて紹介し、子どもといっしょに作ることができる遊具を実際に制作するという内容であった。短時間に多種類の教材を紹介したため、参加者にとって、教材例を作って持ち帰る研修となってしまったのではないかとという反省が残った。幼稚園の場合は、教材作りを中心とした研修の場合も、同じ園の教員が複数参加して研修の場を共有するため「対話」が生まれ、現状とのすり合わせができ、研修の成果を実践に反映しやすいが、保育所の場合はそれが難しいのではないかと感じた。今後多くの幼稚園が、長時間保育の子どもが在籍する「こども園」に移行していくことが予想される。保育所での研修のあり方を探究することは、保育研究の重要な課題の一つであると考えた。

2. 実践提示型研修の実施

以上のような問題意識から、保育所における新たな研修のあり方を考案した。それは、具体的な保育実践を提示し、それについて参加者同士が対話し、交流を通して自らの保育を振り返り、同時に保育技術を学ぶという形式の研修である。実際には、実践から学びたいという保育現場からの要請に応じる形で始まったが、模範授業のように提示するだけでは、参加者の造形指導における専門性の向上には結びつかず、一過性のものになってしまうと考えた。そこで、提示する実践は、参加者に新たな視点を与え、省察のきっかけとなり、子どもの主体的な表現を引き出す援助について考察する「素材」となることを意図して計画した。そして、援助の根拠となる保育観や造形表現にかかわる保育技術については、参加者自身が自ら気づく研修にしたいと考えた。そのためには、主体的に表現する子どもの姿を通して表現の援助に対する興味関心を喚起し、参加者が五感で感じ、心が動き、納得する研修にする必要がある。

具体的には、事前に参観のポイントと評価の観点を示す場を設け、幼児と初対面の外部講師の実践であるため、必ずしもよいモデルではないことを伝え、参観後に気づいた点を教えてほしいと依頼した。また、実践後にはグループディスカッションの時間を設け、その後、そこで語られたことを発表する機会をもつこととした。実践者自身も振り返りを行い、保育

者の意図と子どもとのズレが生じた場面をあえて取り上げ、そこでの対処について担任の保育者も交えて検討した。そして、こうした出来事に子どもの発達の可能性と保育者の成長の契機が潜んでいることを共有できるようにしたいと考えた。

一方、保育実践を提示するのは保育時間内であり、子どもたちの最善の利益が守られなければならない。実践内容は保育現場からの要望と実態に即したものを考案することとし、現場との事前協議を綿密に行い、子どもにとって有意義な保育実践であることと保育者研修としての有効性の両立を目指した。

これまで実施した実践提示型研修の概要を整理する（表2）。

表2 実践提示型研修の実施概要（2011年まで）

実施時期	提示した実践	対象クラス	主なねらい
2008年 6月	しずくの冒険	5歳児（共同）	誰もが楽しく
2008年 9月	自分人形と大きな木	5歳児（共同）	5歳児の発達に応じる
2009年 6月	自分人形と雨の日のお散歩	5歳児（共同）	遊びへの発展
2009年12月	おしゃれな服から	4歳児	筆で描く体験
2010年 7月	みんなで泳ごう	5歳児（共同）	身体の動きの表現
2010年10月	絵具で動物を描こう	4歳児	筆でのびのびと表現
2011年 9月	ステンシルとにじみ+はじき絵	3歳児	3歳児の発達に応じる

（実践場所は同じA市立保育所）

3. 実践提示型研修の方法

現在では、以下のような方法で実施している。

本稿では、「運動会の入退場門作り」をテーマに行った研修について具体的に述べ、実践提示型研修について検討する手がかりとする。

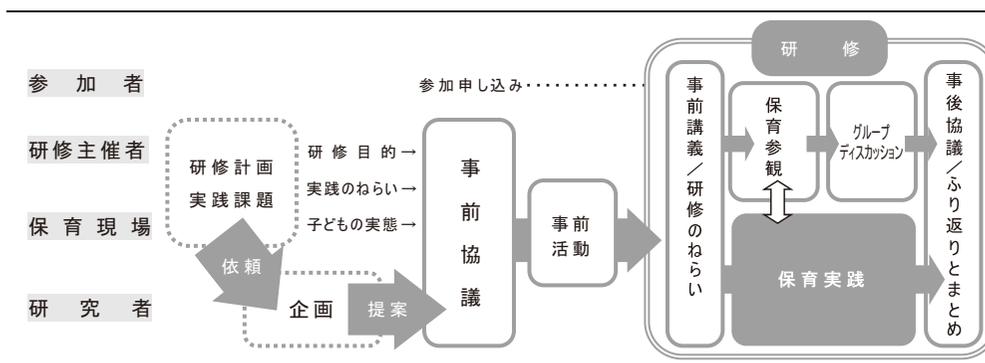


図1 実践提示型研修の流れ

結果と考察

1. 研修までの経過

実践する保育現場から「運動会の入退場門作り」について学びたいという希望があった。筆者は、大きな制作物や迷路作りの指導経験はあったが、保育園の運動会の入退場門についてはイメージが浮かばなかった。そこで、子どもたちが門を作る活動を行う意義やその過程での学びについて考察した。制作物が大きく、子どもたちだけでなく保護者の目にも触れることから、達成感を感じる活動になると考え、一人一人が自分なりに表現し、「自分たちでつくった」という実感の持てる造形表現活動にすることを目指した。学びについては、「表現」としての学びだけでなく、「人間関係」「環境」「言葉」「健康」の領域の学びを含んだ活動にしたいと考えた。実践を考案する手がかりとなったのは、「かえで幼稚園」から送られてきたVTR『遊んでほくらは人間になる』⁽¹¹⁾である。テレビ新広島がニュース特集として放映した映像の後半で運動会への取り組みが紹介され、『箱んでハイタワー』という競技に取り組む子どもたちの姿に感銘を受けた。その競技はクラス対抗でダンボール箱を積み上げ、高さを競うもので、箱選びから始める事前の取り組みの過程で、試行錯誤や挫折を繰り返しながら工夫を重ねる子どもたちの姿に、活動過程の重要性を再認識した。そこで研修では、立派な門を作る実践を見せるのではなく、過程を重視した造形表現指導の視点を示し、子どもたちの活動過程での学びに参加者自身が気づき、自分自身の保育を振り返る機会にしたいと考えた。

これまでも、事前の打ち合わせにおいて、行政の研修担当者や保育所長、主任、担任と語り合う中で実践内容を決めていくようにしていたが、今回も、これまでの取り組みのどこに問題を感じ、研修に何を期待しているのかを問いかけることから話し合いを始めた。そして、マンネリ化している門作りに疑問を感じながらも具体的な改善案が浮かばない状況が語られたため、筆者が実践案を複数示し、研修の主催者と保育現場に提案の意図を理解してもらった。この話し合い場面でも、異なる立場や視点からの発言を重ねながら詳細を決めていくという方法を取り、子どもたちにとっても、研修の参加者にとっても意味のある取り組みになるような指導計画を立てた。研修の方法については、すでにこれまでもグループディスカッションを取り入れる方法で行っており、今回も参加者の相互交流からの学びを重視した。

2. 研修の概要

- 1) 開催時期 2012年9月
- 2) 開催場所・時間 A市立保育所 9:00~11:45
- 3) 研修参加者 経験年数1年未満から27年の保育士 34名
- 4) 実践対象・時間 A市立保育所5歳児クラス23名 9:30~10:45

5) 使用用具 会場図参照（絵具は野外に対応するためアクリル系水彩絵具を使用）

6) 研修の流れ

- 事前講義（研修のねらいを説明し、参観のポイントを示した） 30分
- 保育実践の参観 45分
- グループディスカッション 30分
- 事後協議（グループの発表と質疑応答と研修のまとめ） 60分
- 研修評価（アンケート） 10分

3. 「運動会の入退場門作り」の実践

1) 事前の取り組み

- ダンボール集め…… 近隣の八百屋さんに行く
- ダンボールで遊ぶ（8月中旬～）…… つぶす、解体する、つなげるなど
- 本時の活動を知らせる（一週間前）
- グループ分けを行う（12名×2グループ）
- 本時の活動を具体的に知らせる（前日）
- *子どもの服装など ・素足 ・汚れてもよい服を着てもらう

2) 環境設定

当日の会場図は以下のとおりである（図2）。

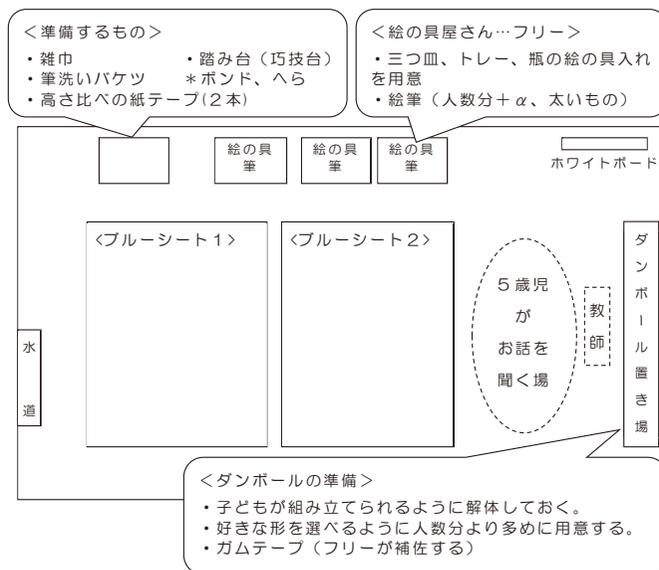


図2 研修会場の配置図

3) ダンボール箱をつくる

一人一個の箱を作って高く積み、運動会の入退場門を作ることを伝えた。一人一個の箱にしたのは、自分の表現に愛着をもち、異なる表現が重なる美しさに気づいてほしいと願ったからである。

すでにダンボールで遊ぶ経験をした子どもたちだが、展開図のように開いたものを箱にするのは初めての経験である。平面から立体をつくる体験は、5歳児クラスの子どもにとっては、興味深いものであったよ

うで、集中し熱心に取り組んでいた(写真1)。その際、重ねてステキな門にすることを伝え、そのために絵具で色を塗るのには、印刷面と裏面とどちらがよいかを尋ね、裏面を表にする活動に理解を得た。なかには「ナス」の描かれた面の方がよいと言う子どももいたので、思いを受け止めて見守りつつ友達がなぜ裏返しているのかを伝えた。その子どもが友達の様子を見て裏返すことを決め、テープをはがし始めたところ、それに気づいた友達が手伝いに来た。この事例に見られた「教師の予想とのズレ」の意味とその対処については、実践後の協議会で話題にした。

また、ガムテープを切るのに一部大人の援助が必要であったが、ほぼ子どもたち同士の力で立体にすることができ、「箱にするってトンネルではなくて閉じるってことだよ」などと教え合う姿もあった。テープの貼り方も、丈夫にするために両側から貼るなど、それぞれに工夫が見られ、テープを貼るときにはお互いに箱を支え合う姿が見られ、丈夫にできたことを、たたいたり転がしたり互いにつけ合ったりしながら楽しそうに確かめ合っていた。できた箱を太鼓やイスやロボットに見立てて遊ぶ様子も見られた。

4) ダンボール箱を積む・高さを比べる

それぞれが組み立てた箱を2つのチームに分かれて積み上げた(写真2)。どちらが高く積めるかという投げかけをしたことにより、話し合いや工夫が生まれ、大きな箱を下にすることを提案する子どももいた。また、片方のチー



写真1 箱を裏返して組み立てる



写真2 2チームに分かれて箱を積んだ高さを競う

ムは安定していたのに、もう一方のチームは途中で崩れてしまった時には、「隣は箱が横になっているのに、うちは縦だからグラグラするんだ」という発話もあり、相手から学ぶことにもつながった(写真3)。途中でもう積むのは嫌だという発言もあり、困難をいかに乗り越えるのが課題となる場面もあった。結果的には全員の箱が積まれたが、こうした葛藤場面も学びの機会ととらえたい。また、なかには、「小さいのを上にしたら東京スカイツリーみたい」という表現も聞かれた。高さを紙テープの長さに置き換えて比べることに興味を持った子どもが多く、測る場面でテープの端を持つ手伝いを積極的にする姿が見られた(写真4)。

また、当日欠席者がいたため、人数がアンバランスになっていたが、高さ比べをしている時に箱の数の違いに気づき、少ない方が高かったことを不思議に思っている子どもがいた。

5) ダンボール箱に絵具を塗る

箱への着色場面では、立体に絵具を塗ることを楽しみ、自分が感じたままに表現できるよう指導し、色を変える時は濁らせないために入れ物と筆を一緒に交換するなど、用具使用上の最低限のルールだけを伝えた。誰一人迷うことなく取り組み始め、絵を描く、模様を描く、塗り分けるなど思い思いに絵具での描画を楽しんでいた。絵具コーナーには、色を見て選べるように溶いた絵具を透明の容器に入れて設定しておいたが、色を取り換える際は友達同士で交換する様子も多く見られた。なかにはガムテープを色とりどりに塗り分ける子どもの姿も見られ、興味関心の多様さを実感する機会となった(写真5)。また、ガムテープ上もはじかずに着色できる絵具であることを伝え合うなど、それぞれの箱を塗っていても仲間と共に活動を楽しんでいた。色に関しては、虹を描くのに多色を使う子ども、重ね塗りをして色の変化を楽しむ子どもがいたほか、「派手な黒だ」と混色して作った黒であることに気



写真3 箱が崩れたチーム



写真4 高さをはかる



写真5 ダンボール箱に自由に絵具を塗る

づいた子どももいた。

筆者の実践は、それぞれが思い思いに色を塗る場面までとし、乾いてから再度箱を重ねて門をつくる活動は、後日、担任と子どもたちで行うこととした。

4. 研修に対する評価

研修の評価を行うためにアンケートを実施し、参加者の中の29名から回答を得た。質問内容と結果は以下のとおりである(表3、図3)。「そう思う-まあそう思う-あまりそう思わない-そう思わない」の四段階評定とした。

表3 アンケートの内容

質問項目
1. 研修は有意義でしたか？
2. 実践を直接見る研修は他の形式よりよいと思いますか？
3. 以下のことを学ぶことができましたか？
① 年長の発達に適した活動について
② 造形活動は領域をつなぐということ
③ 表現活動は過程が重要であること
④ ダンボールという材料について
⑤ 絵具や筆などの用具について
4. 子どもの表現や学びのあらわれと思われる「つぶやき」や「行為」があったら教えてください。
5. 感想等自由にお書きください。

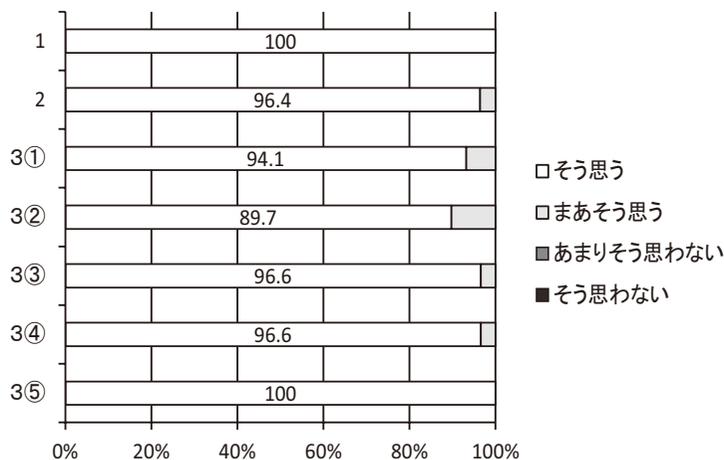


図3 研修に対する参加者の評価

その結果、参加者全員から肯定的な評価が得られ、全員が「研修は有意義であった」「絵具や筆などの用具について学ぶことができた」と回答した。そして、ほぼ全員が「実践を提示する研修は他の形式よりよい」と評価し、研修から「発達との適合」や「造形活動は5領域をつなぐものである」こと、「表現活動は過程が重要である」こと、「ダンボールという材料について」も学ぶことができたという回答し、否定的な回答はまったくなかった。また、感想等を書く自由記述欄には、「造形と一言で言っても、協力・工夫・競争・達成感など多くの学びを子どもたちに味わわせ楽しませることのできる大変すばらしいものだと感じました」「造形表現において子どもの主体性をいかに引き出すかということが大きな学びでした」「実際に実践指導をみることで素材の大切さ、保育展開も学ぶことができてよかった」「いつもテーマや目的を決めてもって行ってしまい、怒ったりしてしまうことが多い。ゆとりをもって子どもを本当に考えての活動をしていきたいと感じました。実際にできればやってみたいですよ」という記述が見られた。

このように、自由記述には、「あらためて感じた」「感動した」など、心が動いたと思われる記述が31%の回答に、「わかった」「学んだ」などの理解内容も31%に記述されていた。このことから、自ら気づき学ぶ機会となったことが示され、「反省した」「学びをいかしたい」「～ようにしたい」など、自分の取り組みを変えていこうとする記述も28%の回答に見られたことから、全参加者にとってではないが、自己の振り返りとその後の成長につながる研修であったことが示唆された。

5. 実践に対する振り返り

アンケートでは、保育実践を直接の評価対象としなかったが、本研修が参加者だけでなく、子どもたちにとっても意味のある取り組みになるよう計画したことから、事後協議とアンケート結果から実践の振り返りを行う。まずアンケート結果からは、参加者全員が「造形活動は5領域をつなぐ」と感じたことから、本実践が幅広い学びの要素を含んでいると理解したことが推察される。子どもの姿に関する記述では、積極的に参加していたこと、満足するような様子、生き活きと楽しそうに活動する姿が評価されていた。実践後の協議においても、保育者の指示がほとんどない中で主体的に行動し、造形表現を楽しむ子どもたちの姿を評価する声は複数あった。質疑応答場面では、担任が一人の場合にどのように進めればよいのかを問う声もあったが、何日かに分けて計画することも可能なのではないかと提案した。

実践過程においては、事前活動として子どもたち自身が近隣の八百屋さんにダンボール箱をもらいに行ったことが、地域との交流になっただけでなく、ダンボールに対する愛着を一層強くしたと思われる。それは箱の絵柄にこだわる姿からも理解された。また、つくる過程にそって、潜る、被る、穴を見つけて覗く、額のようにするなど、ダンボールというものか

ら誘発されたさまざまな表現行為が見られ、感性やイメージを豊かにする「造形あそび」が展開した。積み際には、高さを紙の長さに置き換えて比較する、箱の数と高さの関係に気づくなど、数や量などに親しむ機会にもなった。また、互いに助け合い、背の高い子どもにも高い所に乗せるのを頼むなど、人間関係の側面においても深まりや学びの姿が見られた。彩色場面では、心を開放して自由に楽しむ過程で色や形や物の性質に関する多様な学びがあり、全体として、幅広い領域にかかわる育ちが期待される造形表現活動となった。

反省点は、積み上げると箱の上下の面が見えなくなることや、彩色を始めたため、箱のすべての面に思いが込められ、重ねるのが難しくなってしまったことである。そのことに気づかせる言葉かけや入退場門にするという目的を再確認する話し合いをすることもできたが、ここでは、心のままに自分の箱をつくる楽しさを優先した。

実践後はクラスで仕上げに取り組み、どうしても見せたい面を調整し合いながら再度積み上げた。完成した門には苦心の跡が見られるが、ひとり一人独自の表現が組み合わされた魅力的な入退場門になり、運動会を飾った(写真6)。

6. 研修の成果

研修後の参加者からの評価について述べ、自己の振り返りとその後の変化につながる可能性が示唆されたが、造形表現指導上の専門性の向上については、さらに詳細な検証が求められる。また、研修の本来の目的から考えると、参加者が保育現場に戻ってから、保育の質の向上に向けてどのように取り組むかによって評価されるべきであろう。

本研修の成果としては、実際に、



写真6 運動会当日の入退場門



写真7 他の保育所でつくられた入退場門

この活動が他の保育所で実践されたことがある。保育者が本研修に参加したある保育所では、研修後に入退場門作りについての見直しが行われ、入退場門を子どもたち一人ひとりの表現の場にする取り組みを行った。運動会当日に、その門を見に行ったところ、マスキングの技法を新たに取り入れるなど、独自性が加えられていた(写真7)。また、運動会後に門といっしょに記念撮影をしている親子の姿が見られたことから、この取り組みが、子どもたちが達成感をもち、作品に愛着をもてるものであったことが理解された。

今後の課題

本稿で述べたのは、これまで筆者が担当してきた造形表現の研修の形態の一つである。実践提示型研修は、造形表現指導上の専門性の向上を目指すために有効であったが、さまざまな条件が整った上で実施が可能となったものである。幼児期の造形表現指導のねらいは、集団生活の場での自発的な表現体験を通して感性と創造性を豊かにし、思考力やコミュニケーション力を育み、情緒の安定をはかって、人の中で自分らしく生きる力の基礎を培うことである⁽¹²⁾。今後の課題は、こうしたねらいが達成されるような指導力について検討し、表現領域や造形表現にかかわる多様な保育者研修の方法を整理し、それぞれの形態でどのような専門性が育まれるかを検討し、保育者の保育の現場での学びについてさらに探究することである。

謝 辞

研修内容の考案と保育実践にお力添えいただいた関係者の方々と子どもたち、写真掲載を了承いただきましたことに心より感謝を申し上げます。

文 献

- (1) 厚生労働省 2008 保育所保育指針
- (2) 柏女霊峰監修 全国保育士会編 2009『改訂版 全国保育士倫理綱領ガイドブック』全国社会福祉協議会出版部
- (3) 今井豊彦 2012 自ら学ぶ保育者になるために 篠原欣子・佐藤綾子・今井豊彦・木村歩美「これからの保育者のために」萌文社 75-106.
- (4) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 2008「研修ハンドブック」世界文化社
- (5) 岸井慶子 2011 保育者の資質向上と研修のあり方 保育学研究, 49-3, 81.
- (6) 三谷大紀 2008 保育者の専門性の向上を支える研修と保育実践の深まり 発達, 113. ミネルヴァ書房 66-73.
- (7) 森上史郎 1996 カンファレンスによって保育をひらく 発達, 68, ミネルヴァ書房 1-4.
- (8) 全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会 2012 『わくワークシート』(「保育通信」の付録として発行)
- (9) 立元真・古川望子・福島裕子・永友絵里 2011 保育者の養育スキル研修が幼児の行動に及ぼした効果 宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学, 24, 1-10.
- (10) 横 英子 2009 幼児の造形表現活動と造形教材Ⅲ－協同的な造形表現活動の実践と検討－

日本保育学会第62回大会発表論文集, 71.

- (11) かえで幼稚園 2012 VTR『あそんでぼくらは人間になる』テレビ新広島制作 (ニュース特集で2012年6月に放映された. その後, 第21回FNSドキュメンタリー大賞ノミネート作品も制作された.).
- (12) 横 英子 2008 保育をひらく造形表現 萌文書林

**Practice for a Training Session for Nursery Teachers
to Improve Art Education Skills :**
**The Practice and Assessment of a Training Session
in Daycare Art Activities**

MAKI, Hideko

This study reports practice for a training session and an examination of its process for nursery teachers to improve art education skills. This training session was designed and organized by the reporter. The head teacher and the reporter organized the session, they prepared an original session program and practiced the art education in day nursery practice with children and the participants. After the session, participants and organizers held a group discussion reflecting the process. This report examines a practice of art training session “Making an entrance gate of Undoukai”. The session was designed for nursery teachers who want to get better skills of art education. In result, participants thought it was useful. The process suggests that the session extracts participants’ own reflection and can grow their professional quality.

